

株式会社アニマルアシステッド
代表取締役 今木康彦
獣医師/社会福祉士

1. 動物介在介入（アニマル・セラピー）の分類

動物介在介入（アニマル・セラピー）を実施する場所によって5つに分類することができる。それぞれについて、どのような動物種を介在させていくのか、特徴や注意点などについても述べていくこととする。

（1）施設訪問型

ボランティア団体等が動物を連れて施設（高齢者施設、身体障がい者施設、知的障がい者施設、精神障がい者施設、小児病棟、ホスピス病棟、学校など）を訪れる形態である。動物介在介入の中の動物介在活動（ボランティア活動）として最も多く実施されている形態である。

①介在動物

犬、猫、ウサギ、馬など

②特徴

施設で動物を飼育する必要がなく、訪問する動物の数が多ければ一度に多くの利用者や患者が動物と触れ合えることができる。また、部屋に訪問していくことで個別対応も可能である。このように利用者や患者は施設外の人や動物と交流することができる。

③注意点

感染症やアレルギーなどが広がるリスクや動物が嫌いな人がいることから利用者や患者およびその家族、施設スタッフの理解が必要となる。訪問時間が限られていることから利用者や患者と動物との触れ合う時間が短くなってしまう。

（2）施設飼育型

施設で動物を飼育し、その動物を介したプログラムを実施していく形態である。動物の飼い方として、施設スタッフの個人で飼う場合と施設全体で飼う場合がある。

①介在動物

犬、猫、ウサギ、カメ、鳥、魚、牛、豚、羊、傷病野生動物など

②特徴

高齢者施設などでペット飼育をすることでペットを飼えない人でも

毎日ペットに会うことができる。また、小学校などの学校飼育動物や、牛、豚、羊など産業動物を飼育する動物介在介入プログラムもある。

海外では、刑務所でシェルターから引き取った犬を囚人が再度人と犬との信頼関係を構築して里親に譲るというプリズンドッグプログラムが成果をあげている。シェルターの犬以外にも介助犬を育成するプログラムなどもある。さらに珍しいプログラムとして、傷病野生動物の自然復帰プログラムを動物介在介入プログラムとしているケースがある。

これらのプログラムは、常時動物がいることから施設独自の長期的な動物介在介入プログラムを展開することが可能となる。

③ 注意点

高齢者施設などでは、感染症やアレルギーなどが広がるリスクや動物が嫌いな人がいることから利用者や患者およびその家族、施設スタッフの理解が必要となる。また、スタッフにおいては飼育管理の仕事が加わることとなり、動物の専門家が不在のケースでは予防、肥満など動物の健康管理を害する可能性がある。さらに、動物介在介入プログラムを計画されていないとただ動物が飼育されているだけの状況になってしまうこともある。そして、ある特定の利用者や患者だけが可愛がったり、動物の取り合いになったりすることもある。

(3) 在宅訪問型

ボランティア団体等が動物を連れて支援対象者の自宅を訪れる形態である。

① 介在動物

犬など

② 特徴

自宅で飼うことができない動物と1対1で触れ合え、訪問するボランティアや動物とのかかわりが深くなる。この形態はあまり実施されていないが、例えば地域の福祉団体と連携しながら高齢者の自宅にボランティアが犬と一緒に訪問することで安否確認も含め地域社会とのつながりを目的としたプログラムが可能となる。

③ 注意点

支援対象者の自宅なので一度に少数の動物しか触れ合えない。

(4) 在宅飼育型

一般家庭でいう「ペット飼育」の状態である。

① 介在動物

犬、猫、ウサギ、ハムスター、カメ、鳥など

② 特徴

飼い主と動物との個々の結びつきが強いことや毎日動物とのかかわりがあることを前提とした動物介在介入プログラムを展開することができる。動物を飼育することで規則正しい生活を送るようになれる、動物を介して家族間の会話が増えたりするようになるなどの効果がある。

また、飼い主が飼っている動物を介してプログラムを組むこともできる。飼い主が子どもを対象とした英会話教室をしており、そこに飼っている犬を入れることで動物介在介入の中の動物介在教育という手法を用いて英会話教室を実施していくケースなどである。

③ 注意点

飼い主の動物を飼育することは終生飼育が原則だが、飼い主の状況によっては里親など次の引き取り先まで見据えておく必要がある。また、動物が先に亡くなると飼い主がペットロスに陥る可能性がある。このことも視野に入れておく必要があるが、動物介在介入の手法として亡くなった動物を介して飼い主を支援および援助をすることもできる。

(5) 屋外活動型

高齢者施設等や自宅では飼育できない動物と触れ合う形態である。

① 介在動物

馬、イルカ、動物園動物、水族館動物、野生動物など

② 特徴

支援対象者や支援者が野外施設まで出向くこととなる。日光に当たり風に吹かれながら、身体を使った運動療法、身体的リハビリテーションなどの動物介在介入プログラムがある。

乗馬療法（ホースセラピー、障がい者乗馬）は、イギリスではホースセラピーの国家資格として整備されており、ドイツではホースセラピーが保険点数に適用されるなど身体障がい者に対してのリハビリテーション医療として完璧な治療システムが確立されている。また、イルカ療法（イルカセラピー、ドルフィンセラピー）は、水族館で飼育されているイルカを介したプログラムがされているところもあるが、野生のイルカの協力のもと知的障がい者、特に自閉症の子どもに対して発語や笑顔の表出、人との協調性などの療育に抜群の効果を発揮しているところもある。

その他にも、動物園や水族館の見学、山や川でのフィールドワークなどによる動物介在介入プログラムがある。

③ 注意点

大掛かりな施設が必要となる。

2. 介在動物の動物種

動物介在介入を実施するうえでどの動物種を介在させていくのかは、実施団体の考え方やプログラム内容によって違いがあるが、個人的には全ての動物種を対象と考えている。なぜならば、動物介在介入プログラムは支援対象者のためのものであって、支援対象者のニーズやプログラム内容によってどの介在動物種にするのかを選択していくものと考えているからである。ここでは、介在動物として一番活躍している犬について述べてみたい。

【介在犬（セラピー犬、セラピードッグ）】

犬は人が野生動物を最初に家畜化した動物であり、野生動物を家畜化できることを教えてくれたのは犬と言われている。約 15,000 年前から今日に至るまで人とともに歩んできた一番身近な動物であり、人と同じ社会的動物で人と共感する部分も多い。古代の人とたちは犬と一緒に暮らすことで、安心感と癒しをもらっていたのではないだろうか。おそらくその安心感と癒しは昔も今も変わらないであろう。

日本で最も多く展開されている犬と一緒に高齢者施設等へ訪問する動物介在活動において、その実施主体は個人から NPO 法人等の団体まで様々であり、それぞれがセラピー犬などと称し独自の適正評価基準を設けている。それらの多くは、一律の基準を満たすことで参加の適性を評価する方法がとられている。しかし、犬について「犬のどういうところが好きですか」「犬と何をしている時が心地良いですか？」というアンケート調査をしたところ、図 1、図 2 のような結果が得られた。これらの結果から人から犬へのニーズには多様性があり、つまりセラピー犬にも多様性が求められてくるものと考えられる。セラピー犬の定義を考えたとき、1つの枠に当てはめると犬の多様性を認めないことにもつながりかねない。

そこで、介在犬の多様性を認め活躍の可能性を広げるための「今木方式介在犬の定義」を提案している(第 11 回日本臨床獣医学フォーラム年次大会 2009 発表)。「今木方式介在犬の定義」は、クライアントのニーズに合った介在犬をカテゴリー別に登録をする方式である(図 3、図 4、図 5)。介在犬として健康管理、疾病予防、人に友好的な性格、基本的なしつけといった必須条件が満たされた上で、「人の歩調に合わせて歩くことができる犬」「人の膝の上でリラックスできる犬」「ボール遊びが好きな犬」「遊ぶ姿が可愛い犬」「ドッグダンスができる犬」などのカテゴリー別に登録していく。そして、クライアントに沿った動物介在介入プログラムのニーズに合った介在犬をマッチングさせていく。この方法であれば、1頭1頭の個性をそのまま発揮することができストレスも少なくすむ。また、飼い主もあらためて犬の特徴を認識することで飼い主と犬との関係性の向上にもなる。この方法であれば、多くの犬が介在犬として登録でき、動物介在介入の普及にもつながる。

3. 介在動物が人に及ぼす効果

動物介在介入が知られるようになる前から、ペットの世話をすることは子供の情操教育や社会的欲求を満たすものと言われてきている。

ペットを世話することで「命の大切さを実感できる」「責任感が身に付く」「感情をコントロールできるようになる」「心が強くなる」「自分を大切にすることができる」などの心を育む情操教育となることが知られている。

また、マズローの法則の五段階のうち第三段階の集団に属したいという所属の欲求と仲間が欲しいという愛の欲求といった欲求が人にはあり、これが満たされないと孤独感や社会的不安を感じたりする。ペットの飼育をすることでこれらの社会的欲求を満たしてくれることもよく言われている。

近年の様々研究から人が動物から得られる効果には、身体的（生理的）効果、心理的效果、社会的効果の3つの効果があることも分かってきた。

1□身体的（生理的）効果

血圧の低下、心拍数の低下、血中コレステロールの減少、中性脂肪の減少、副交感神経の亢進、神経や筋肉の運動機能の改善など

2□心理的效果

不安が減る、笑顔が表出する、気力が湧き出るなど

3□社会的効果

人とのかかわりを広げる（動物が社会的な潤滑油的な存在となる）

これら3つの効果に共通することは、どの効果も「無理なく」得られることである。「無理なく」体はリラックスし、「無理なく」自然に笑顔が表れ、そして「無理なく」動物を介して人とかかわれるようになるのである。

動物介在介入プログラムを考えると、支援対象者が好む動物種を選び、その動物を介してどの効果を支援対象者にもたらしることができるのかが大切になってくる。

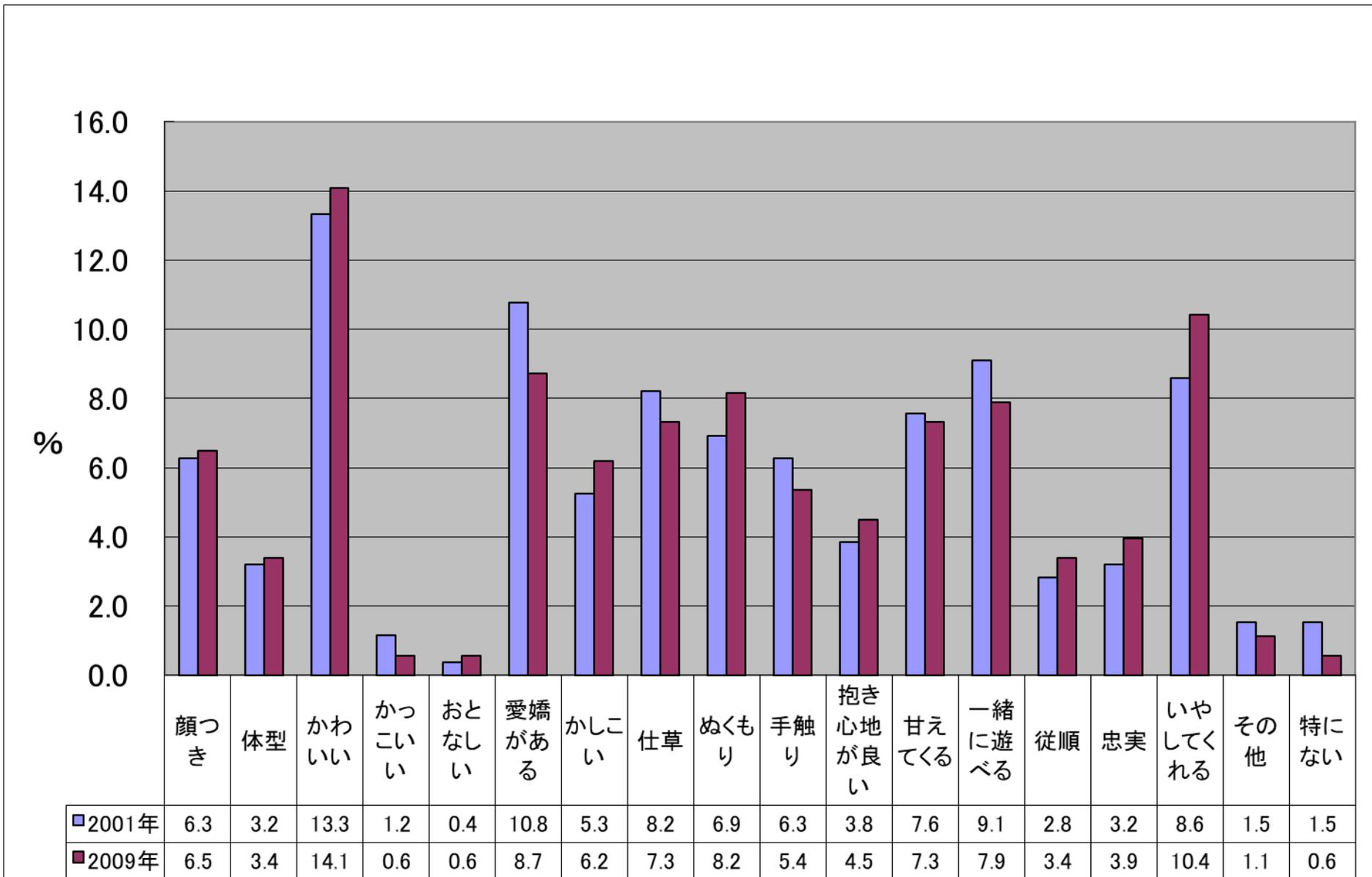


図1 「犬のどういうところが好きですか？」

(第11回日本臨床獣医学フォーラム年次大会2009年発表)

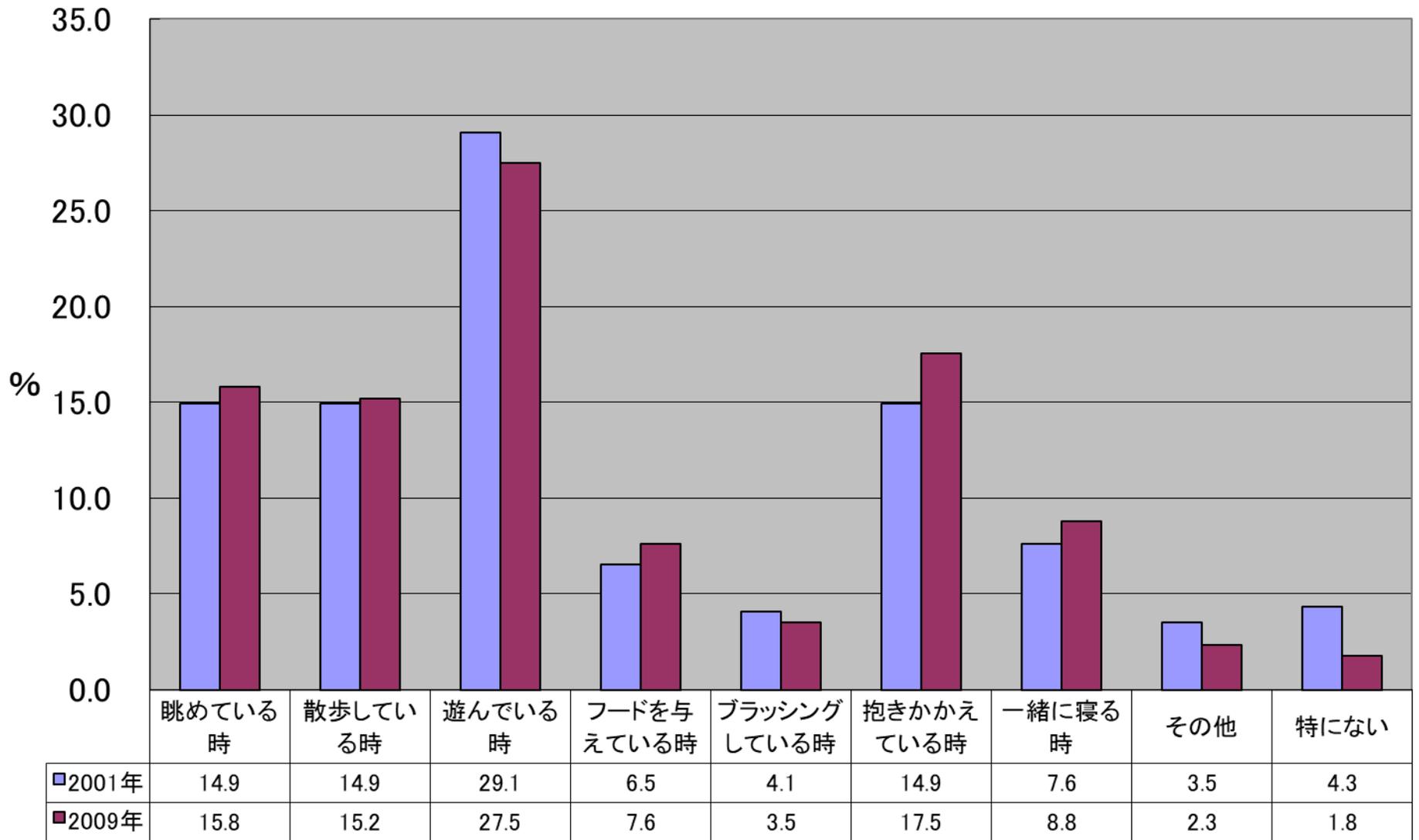


図2 「犬と何をしている時が心地良いですか？」
 (第11回日本臨床獣医学フォーラム年次大会2009年発表)

人から犬へのニーズには

「多様性」がある



介在犬にも「多様性」が求められてくる

図3 今木方式介在犬の定義

(第11回日本臨床獣医学フォーラム年次大会2009年発表)

介在犬として、健康管理・疾病予防、人に友好的な性格、基本的なしつけといった必須条件

人のニーズに合った犬の特徴を
カテゴリー別に介在犬として
登録していく方式の提案

図4 今木方式介在犬の定義

(第11回日本臨床獣医学フォーラム年次大会2009年発表)

支援対象者の 多様性

《メリット》

- 支援対象者のAAIプログラム参加意欲の高まり
- 心身の安定
- 効果的なAAIプログラムになることへの示唆

マッチング

介在犬の 多様性

《メリット》

- 介在犬の持ち味を發揮
- 動物の福祉としてストレスの軽減
- 多くの飼い犬が介在犬として登録が可能
- AAIを広く普及

図5 今木方式介在犬の定義

(第11回日本臨床獣医学フォーラム年次大会2009年発表)



写真1 動物介在活動風景



写真2 乗馬療法
～脳性麻痺利用者とセラピー馬との乗馬後の交流～



写真3 介在犬(セラピー犬)たち